地を這う透谷――「亡友反古帖」より見えるもの――

九里順子

初めに

近代文学の先駆者、北村透谷（明治元・一八六八～明治二七・一八九四）は、完成されなかった数多くの構想を残している。透谷没後に『文学界』の元同人によって編集された『透谷全集』（文武堂　明35・10）には、島崎藤村が保管していた一部を抜き出して紹介した「亡友反古帖」が収められている。[注1]

「桃太郎遠征記」「四条畷」（以上、十九歳または二十歳頃）「人間村漫遊記」「別乾坤捜索日記」「地獄極楽巡遊日記」「平家行」「常盤曲」（以上、二十二歳より二十三歳頃）等、御伽草子、戯作、謡曲を思わせる題名は、透谷の関心の幅と伝統的な文芸への親炙を窺わせる。中でも、藤村が、二十二歳より二十三歳の頃と推測する中にある「荒野の戦ひ」は、その破天荒な筋書きが印象に残ったと見えて、次のように記されている。

（其脚色は非常に豊饒なる野ありてこゝに曾て蛇を平げたる一の大なる蜒蚰が野の長となり、でん〳〵虫が箱をかついで配権を執行し居り、其臣下には虻、蜂、とんぼ、蛍、芋虫、毛虫、蚯蚓、蜥蜴、まつ虫、すゞむし、くつはむし、蛙、きり〴〵す、蟬、蜻蛉、赤とんぼ、蠡、ばつた、ひぐらし、かじか、虱、蚤、宮守、蟻、油虫、蝿、蚊、げじ〳〵、百足、わらじ虫、けら、ふくろぐも、くさひばり、玉虫、黄金虫、などありて双蝶を主人公ととなし、こゝに蛇外より来りて彼等と戦ひ全く荒野となるの趣向）

蛞蝓が蛇を討ち破って野を支配するという着想も荒唐無稽だが、登場する夥しい虫に驚かされる。成敗された筈の蛇

がやって来て、戦乱の果に全てが壊滅するという結末も、「石坂ミナ宛書簡草稿　一八八七年十二月十四日」に、「蓋し未来の結果を想像する時ハ、再びのあの大洪水を来たすか然らざれバあまたのくりすとを出すにあらざれば、到底社界の破滅を免れざらん」と書かれている透谷の虚無的な世界観が、依然として根底にあったことを感じさせる。蝶というモチーフは、短い晩年に書かれた「蝶のゆくへ」（『三籟』7号　明26・9）「眠れる蝶」（『文学界』9号　明26・9）「双蝶の別れ」（「国民之友」204号　明26・10）という一連の抒情詩に見られるように、透谷の魂の表象であるが、次から次へと多種類の虫を挙げていく透谷の筆の運びには、憑かれたような昂揚感が感じられる。透谷が記しているのは、虫という概念ではなく、それぞれの生身の存在としての虫である。透谷の虫へのこのこだわりは何であろうか。

一、自己投影と俳句

「亡友反古帖」には、題名は記されていないが、「戯曲」として、「蚯蚓を見て感あり／蚯蚓、鼠、猫、狐、等いろ〳〵のものを人間位の大きさにして、形を造りて各その思ふところを言はしむべし、／而して之を人に比較すべし。／智情意の動物をして各其性質を顕はさしめば妙」という覚書もある。異類譚の趣もあるが、「而して之を人に比較すべし」と人間を相対化する存在として設定されている。これは、創作上での着想にとどまらない透谷の指向性である。透谷の日記の抄出である「透谷子漫録摘集」（前出『透谷全集』所収）を読むと、「〇地龍子／行脚の草鞋紐ゆるみぬ。胸にまつはる悲しの恋も思ひ疲るゝまゝに衰へぬ。と見れば思ひもうけぬ所に目新らしき花の園。人のいやしき手にて作られし物と変りて、百種の野花思ひ〳〵に咲けるぞめでたき。何やらん花の根にうごめく物あり。眼を下向けて見れば地龍子なり」（明24・5・9）と透谷の視線は、野の花の根元に這い出した蚯蚓に向かう。翌明治二十五年一月十五日には「コーサンド氏より愈々免職の相談あり帰途歩上作あり。／ぬら〳〵とからをはなれた蝸牛」と伝道師のコーサンドが一時帰米するため、通訳の仕事を罷免されることになり、新たな決意を示す句を詠んでいる。この場合も、「から」という保護を脱ぎ捨てた剥き出しの蝸牛に自分を擬えている。橋詰静子が「透谷は、蜓・蚰など「地を這うもの」に自

分を擬すことがある。[注2]」と指摘しているように、地中に棲み、地を這う虫に透谷は自己投影しているのである。これは、小説「我牢獄」（『女学雑誌』甲の巻　320号　明25・6）の「デンマルクの狂公子を通じて沙翁の歌ひたる如くに我は天と地との間を蠕ひめぐる一痴漢なり」という自己把握に直結している。虫に共振する身体感覚は、そのまま形而上的な位置付けに昇華されるのである。「人生に相渉るとは何の謂ぞ」（『文学界』2号　明26・2）では、「「力」（フォース）としての自然は、眼に見へざる、他の言葉にて言へば空の空なる銃鎗を以て時々刻々「肉」としての人間に迫り来るなり。」と、死が不可避である人間の肉体の儚さが鋭敏に感受されている。死に到る肉体という点で、透谷は、虫も人も等しく非力な存在であると捉えていたのであろう。透谷は、そこから「吾人は吾人の霊魂をして、肉として吾人の失ひたる自由を、他の大自在の霊世界に向つて縦に握らしむる事を得るなり。」と、有限の肉体を「美妙なる自然」に跳躍し得る契機へと反転させる。地に棲み、地を這う卑小な生き物は、透谷にとって、人間の実存を見る思いであったのだろう。

虫は俳句の季語である。透谷は、一月に夏の季語である蝸牛を詠んでいるが、心象の句なので季節のずれにこだわる必要はない。注意すべきは、心象が虫の句として詠まれたことである。橋詰によれば、[注3]透谷は生涯で二十二句を遺している。早逝したとは言え、決して多い数ではない。しかし、自由民権運動の地、川口村を再訪した折の紀行文「三日幻境」（『女学雑誌』甲の巻　325、327号　明25・8、9）では、知友で民権運動の支援者でもあった秋山国三郎宅に宿泊し、「七年を夢に入れとや水の音」と民権運動離脱後、「一種の牢獄」「幾多の苦獄を経歴したる」と回想する七年間を印象的に詠んでいる。中山栄暁は、[注4]この句を含めた「（略）翁も亦たねがへりの数に夢幾度かとぎれけむ、むく〳〵と起きて我を呼びこれより談話俳道の事戯曲の事に闌にしていつ眠るべしとも知られず。われは眠りの成らぬを水の罪に帰して／七年を夢に入れとや水の音／と吟みけるに翁はこれを何かと読み変へて見たり。」という記述に着目し、「批評や指導を受けたことは勿論のこと、「俳道」について学ぶところ、大なるものがあったにちがいない。」と推測している。透谷の中に俳句は根を下ろしていたと考えられる。

国三郎、俳号龍子の句集『安久多草子』（明22・10）は、小沢勝美によって解読され、労作『透谷と秋山国三郎　附秋山龍子句集「安久多草子」』（私家版　昭49・7）[注5]に「約三千五百三十句のうちから、約二千句をえらんで収録」され

た。虫を詠んだ中で気になるものを挙げてみる。

雨らしき鐘の響きや火取虫
蟻の塔爰に尊し大三十日
灸(やいと)する背を辷りけり冬の蝿
雛の首並へる椽や冬の蝿
冬の蝿真綿に足をつられけり
世に愛の愁も云ハす蝸牛
白桃や蚋(ぶと)の生るゝ雨後の畑
落てから蜂の出て行椿哉
てゝ虫の小粒になりて初時雨
蚊の声や気短に置筆の音
きり〳〵す鳴や琵琶引袖のうら
花屑に這ハせて捨る毛虫哉
てふに成者とハ聞けと毛虫哉
吹落て丸う成たる毛虫哉
糸引た蜘蛛も落けり芥子の花
世界中見る気て這ふか蝸牛
雷に向ふさま見ゆ蝸牛
うき世にハさハらぬ角や蝸牛
引込ハ世の中の丸し蝸牛

気配りの角に見へけり蝸牛
腹立つハ立程丸き毛虫哉
捻し向た毛虫に志さるひよこ哉
虹もはき兼ぬ顔して蝸牛
顔へ来た蝿の冷たき小春哉
逃る気のなきにしあらす冬の蝿
蝶程の影さす秋の藪蚊哉

生活の中で目と心に留まったものを率直に詠んでいる。『三冊子』（服部土芳、執筆は元禄十五、六年頃か[注6]）の「詩・歌・連・俳はともに風雅なり。上三つのものには余す所も、其の余す所まで俳はいたらずといふ所なし。（略）見るにあり、聞くにあり、作者感ずるや句となる所は即ち俳諧の誠なり。」の実践とも言うべき詠み方である。観察眼が利いており、「花屑に這ハせて捨る毛虫哉」「蝶程の影さす秋の藪蚊哉」など、「俗の中の雅」である。

中でも、蝸牛の句が多いのが注意される。「て、虫の小粒になりて初時雨」は季節の推移を細やかな眼差しで詠んでいるが、その他は、擬人化である。明治二十二年と言えば、二月に大日本帝国憲法発布、三月に第一回帝国議会開設と近代日本の体制が整備された年であった。それは、明治十七年の川口村困民党による八王子警察署襲撃（九月）、加波山事件（同）、秩父困民党蜂起鎮圧（十月）、翌十八年の大阪事件（朝鮮独立計画及びその資金調達のための強盗事件）と自由党員の逮捕（八～十一月）という自由民権運動の瓦解の後の成立でもあった。透谷は、明治十七年晩秋から翌十八年初春にかけて、川口村の国三郎宅で、国三郎、盟友の大矢正夫と三人で共同生活を送った。[注7]「三日幻境」で、「おもむろに庭樹を眺めて奇句を吐かんとするものは此家の老畸人、剣を撫し時事を慨（うれ）ふるものは蒼海、天を仰ぎ流星を数ふるものは我れ、この三個一室に同臥同起して玉兎幾度か欠け幾度か満ちし。」と回想されており、一歩引いた立場から見守っていた国三郎、透谷に強盗計画参加を要請し（この拒絶が、透谷の民権運動離脱の契機となった）自らは強盗を

決行して捕縛された大矢正夫、形而上的な志向性を持ち、運動から離脱することになる透谷、とその後の彼等の歩みも含めて三者三様の姿を描き分けている。国三郎にとっても、遥かに年若い二人と過ごした生活は忘れがたい日々であっただろう。「世界中見る気て這ふか蝸牛」「雷に向ふさま見ゆ蝸牛」「うき世にハさハらぬ角や蝸牛」「引込ハ世の中の丸し蝸牛」という一連の蝸牛の句は、民衆の権利主張が弾圧されお上に楯突くことは許されない状況への鬱屈と、それでも気概は持ち続ける姿勢が投影されている。蝸牛は、龍子の心情を託すモチーフであり、透谷の「ぬら〳〵とからをはなれた蝸牛」は同様の詠み方であると言える。

ハルオ・シラネは、「十七世紀前半、俳諧は日常の小さな虫を句に詠み、庶民の社会のありさまを表現するようになる。たとえば、前述の『毛吹草』（引用者注：松江重頼著　正保二・一六四五）には、蟻、シラミ、ケラ、カタツムリ、ナメクジ、ノミ、蝿など日常生活で出会う虫が登場する。連歌で付句をするために縁のある言葉をまとめた「付合」の表では、シラミは乞食（こつじき）、病人、舟、藪、古い布子、花見頃などと結びつけられ、これらが俳諧におけるシラミの詩的連想となった。[注8]」と述べており、和歌が捨象した俗なるモチーフを俳諧が開拓し、新しい季語は、庶民の生活の比喩としても用いられたことが窺える。

正岡子規が「室町時代の連歌の発句から江戸時代末期の俳諧の発句までを集めて、季語別その他、いくつかの観点から分類整理した[注9]」遺稿を、高浜虚子、河東碧梧桐、寒川鼠骨が校訂し刊行した『類分俳句全集』（アルス　昭3・3～4・9　全12巻[注10]）を見ると、「蝸牛」は、（雨）／（天文）（動物）／（動物）／（木）（竹）／（草）除竹（葉）／（地理）（器物）／（衣冠）（神人）（土木）（飲食）／（角）除肢体等／（殻）（人事）除体角等／除肢体角殻人事等、と詳細に分類され、収録された句数が多い。身近に棲み、自分の家を背負って歩むような姿が、古から興趣を誘って来たのだろうか。「梅雨晴や垣ふち恬る蝸牛」（除来）「五月雨や物干竿に蝸牛」（也有）「たのみなき角とし思へ蝸牛」（暁台）「身一つは容るゝに安し蝸牛」（貫支）「心には翅もあらめ蝸牛」（午心）と、龍子の観察及び感慨に通じる。「蝸牛」の次には「なめくしり」が立項されており、「五月雨に家ふりすてゝなめくしり」（凡兆）「我道を付しよ壁のなめくしり」（半魯）「なめくしりはふて光るや古具足」（嵐雪）「身の果はいつくなるらん土蝓」（牧人）等が挙げられている。こちらの

方が観察が鋭く繊細であり、心象としても深い。シラネによれば[注11]、「江戸時代後期になると、自然の文化的、視覚的なイメージは本草学の影響を強く受けるように」なり、一八〇三（享和三）年に、曲亭馬琴が季節と月ごとに分類された二千六百以上の季語と句例を含む『俳諧歳時記』を出版する。一八五一（嘉永四）年には、改訂増補版の『俳諧歳時記栞草』[注12]を藍亭青藍が出版する。この増補版は、『栞草』という名で知られ、明治以降も広く用いられたという。『俳諧歳時記栞草』の「蝸牛」は「此月より五月ニ至て、霖雨（ながあめ）あるとき、蝸牛多く出て、或は床に登り、又壁に黏（つ）く、高く登るときは其涎随て尽れば随て落つ、其貝にありて、人を見るときは蝟縮ス、児童聚（わらべ）りて出出虫々々と云、出ざるときは釜を打破らむといふ（略）」、「蚰蝓」は「附贏は、皆殼を負ふ蝸牛といふ、殼なきを蚰蝓（なめくじり）と云」とあり、両者は殼の有無で区別される同類であると捉えられていたことがわかる。

「蝸牛」の項目には、「〔夫木〕牛の子にふまるな野べの蝸牛角あればとて身をなたのみそ　寂蓮、「五元集」文七にふまるな庭のかたつぶり　其角、〇文七は髻結師なり」と和歌と俳諧の用例も挙げられている。植木朝子は[注13]、寂蓮のこの歌について、松永貞徳『新増犬筑波集』（寛永二〇・一六四三）の「ふみころされなよなかたつぶり」の句の注として引用され、「天神の御歌となむ」と記されていることを紹介し、江戸時代の俳諧の世界でも強く意識されていたであろうと推測している。更に、『栞草』が挙げている其角の句も含めて、「俳諧においては、踏みつぶされる蝸牛が相当数現れる」が、「『梁塵秘抄』今様のように、蝸牛の動きに関心を寄せ、「舞ふ」と擬人化して明るい作品に仕上げるよりも、踏みつぶされたり高所から落ちたりする姿や懸命に歩く姿を、ユーモアにくるみながらもある哀感をもって捉えていることが多い。」と俳諧に特徴的な蝸牛の詠まれ方に注目している。『類分俳句大観』（第五巻）には、「重々と引き行く家や蝸牛」（志昔）「這出ても付きまとふ家や蝸牛」（才之）「おのが家を足手まとひや蝸牛」（麦翅）と桎梏としての殼を背負う存在として、蝸牛が詠まれてもいる。凡兆の句に見られるように、我が身を保護する殼も持たず、蝸牛より一段と脆弱なイメージを持たれつつも、それを束縛から解放された姿に反転し得る蛞蝓の方が、蕉門の俳人たちには漂泊の身を投影するに相応しい季語だったのかも知れない。

国三郎の「うき世にハさハらぬ角や蝸牛」「気配りの角に見へけり蝸牛」も、寂蓮の「角ありとても身をなたのみそ」

を踏まえて「角」に焦点化している感があり、『茉草』を手許に置いていたことは十分に考えられる。しかし、それは、寂蓮とは異なり、自分の進むべき道の触知も容易ではなく、用心深く構えていなければならない「角」である。国三郎に蝸牛の句が多いのは、先人に倣ったという以上の意味があるだろう。小沢は[注14]、明治十代以降の国三郎の経済状況について、足柄上郡の官員をしていた透谷の父快蔵の月給や透谷の神奈川県会臨時書記の日給と比べつつ、桑仲買、旅籠屋、炭焼、織物と多角経営をしつつ家族や使用人を養っていた実状は、「豪農」とは言え、決して富裕ではなかったと推測している。国三郎は、家を背負い続けた立場と国家権力が増大していく中で閉塞を強いられる民衆の姿を重ねて投影していたのであろう。

透谷は、「秋窓雑記」（『女学雑誌』甲の巻　330号　明25・10）で、当代の人気俳諧宗匠であった其角堂永機について触れている（「第十一」）。永機は「我庵を隔つること杜ひとつ」に住む「名宗匠」であるが、「一日人に誘はれて訪ひ行きつ閑談稍久しき後彼の導くまゝに家の中あちこちと見物しけるが、華美を尽すといふ程にはあらねど、よろづ数寄を備へて粋士の住家とは何人も見誤らぬべし。間数も不足なき程にあれば何をか卿つべきと思ふなるに、俳翁頻りに其の狭陋なるをつぶやきて止まず。」と家屋の狭さに不満を漏らして止まなかったという。透谷は、「俳士をして俗に媚ぶるの止むを得ざるに至らしめたるものあるは余と雖も之を知らぬにあらねど、高達の士の俗世に立つことの難きに思ひ至りて黙然たること稍しばしなりし。」とある程度は世間と妥協するのは止むを得ないと認めはするものの、永機の俗人ぶりは度を過していると暗澹たる思いを述べている。透谷は、この文章の冒頭で「今の世の俳諧士は憐れむべきものなるかな。」と言い切っているが、物質的欲望が何よりも優先している「名宗匠」への幻滅が余程深かったのであろう。

永機の句については、小沢が著書の中で引用している勝峯晋風『明治俳諧史話』（大誠堂　昭9・12）が言及している。晋風が、安田雷石が編集した年間俳句集『明治作家五十鈴川集』（明15・3）から抄出している永機の句を挙げてみる。晋風によれば、『明治俳家五十鈴川集』は、当代の著名俳人五十四人の句を、一人一季十句ずつ、即ち四季四十句採録したものである（「俳壇の静態と点取調の流行／明治俳家集を鳥瞰して」）。晋風は、雷石が選んだ俳人について、「東京の其角堂永機、雪中庵梅年、香楠居幹雄、太白堂呉仙、一具庵尋香、大阪の黄花庵南齢、出雲の釣年庵曲川は、当時一流の俳

諧師として指を折られ、」と記述している（「俳壇の静態と点取調の流行／明治俳家集を鳥瞰して」262頁）。

春の夜もふるびて昼のはつ蛙
さしておく花もひとへや衣更
白露や夕やみつくるものゝはし
時雨来よ竹のあみ戸の青きうち

晋風は、「観念的な句作態度に厭味を感ずるが、風雅人として或る侘びた境地を持つてゐる。個人的にも水平線以上の作家たるを頷かせる。」と一定の評価をしている（同／「売出し作家とその句評」263頁）。「観念的」だが「風雅人」たる境地に到っているとは、洗練された見立てと機知とも言えるだろう。永機の句は、永機没後に其角堂機一と雪中庵宇貫が編んだ旧派のアンソロジー『風正明治俳句集』全四冊（双樹庵発行　明43・5、11、44・11、45・7）にも収められている。『明治文学全集57　明治俳人集』（筑摩書房　昭50・10）には、「新年の部」のみ収録されているので、その中から幾つか挙げてみる。

元日や暮まつ星の早や一ツ
御降りや一年中の花の露
日の影や雑木も洩れぬ花の春
昇る日の唯一輪や年の花
鴉にはぬかり乍らも屠蘇湯哉
餅の粉に化粧もす也嫁か君

透谷が、永機の住いを「よろづ数寄を備へて粋士の住家とは何人も見誤らぬべし。」と評していたように、季感を念頭に置きつつ、それに相応しい言葉を組み合わせ、響き合いを楽しむという遊び心が窺える。青木亮人によれば[注15]、永機は、幕末の「今紀文」と称された細木香以のサロンの一員であり、九代目市川団十郎、五代目尾上菊五郎とも懇意であった「洗練されたディレッタント」である。青木は、永機を「身を持ち崩さず、人間関係の機微をすくいつつ、教養と見識を保ちながら句をひねり続けた俳諧師」であると見、俳句を「文学（literature）」たらしめんとした正岡子規の変革を相対化する存在として捉えている。永機は、明治三十一年の『都新聞』の俳人人気投票で第一位、翌三十二年の『太陽』でも一位だったということで、紛れもない人気俳人であり、大衆の趣味趣向は洗練された言葉遊びを通して季節を楽しむ俳句にあったことが窺える。

永機の句を置いてみると、秋山国三郎龍子の句は、暮しの実感に基づいており、異質であることがわかる。小沢は[注16]、龍子が、弘化二（一八四五）年及び三年の、南街堂文巡、太白堂弧月が選者である「月次混題句合」に龍子の句が頻々と選ばれていることから、若き日の龍子の句は、蕉門の流れを汲む太白堂系統の六世太白堂弧月に大きな影響を受けていると推測している。小沢は、弧月は渡辺崋山と親交があったことに注目し、吉沢忠『渡辺崋山』（昭31・11　東京大学出版会）に描かれた、崋山が、太白堂の紹介で俳諧を嗜む地方の豪農の家に宿泊しながら厚木地方を旅した時の様子と両者の交流の意味に触れて、「子供の頃から、大藩の者に抑えられて、そこから発憤して人一倍の苦労を重ねた崋山。町人出身で、武士の間にあって一歩もひけをとらなかった太白堂莱石。剣道の達人で三多摩にもひろく俳諧をひろめた大衆的な太白堂弧月。これらの人たちのつくり上げた伝統が、平民出身で、一生反骨の精神をつらぬいた龍子に引き継がれ、それが透谷に、地底の水脈というものの存在を実感させなかったとは誰が断言できよう。／それはともかくとして、これらの人たちに、自然や、庶民の生活への凝視が、人一倍強いのは、決して偶然とはいえぬものがあるように、私には思われるのである。」と述べている。

小沢が感じ取ったものは、都の洗練された遊芸とは異なる、暮しの声としての俳句であり、そこに時代や世相への批判精神も胚胎していく。透谷の句も後者の系譜に連なる。龍子の俳句が透谷に「地底の水脈」の存在を実感させたとい

う小沢の直観は的を射ているように思われる。先に挙げた蝸牛の句、及び「捻し向た毛虫に志さるひよこ哉」は、ままならぬ現実の受容という認識と卑小な存在が孕む抵抗の可能性の両方が詠み込まれている。透谷の「ぬら〳〵と殻をはなれた蝸牛」、および『蓬莱曲』（養真堂　明24・5）の見返しに墨書して戸川秋骨に送った句である[注17]「折れたまま咲いてみせたる百合の花」は、龍子の句が内包するものを継承している。

二、本草学と生育環境

透谷が詠んだ蝸牛は、中世の今様や寂蓮の歌を受けて、十七世紀後半の俳諧が開拓した俗なるモチーフであり、時代が下って、本草学の影響を受けた「百科事典的な歳時記」（ハルオ・シラネ）[注18]である『俳諧歳時記栞草』にも形態が詳述され、好んで詠まれた季語である。龍子を介して「作者感ずるや句となる所は即ち俳諧の誠なり。」（『三冊子』）という俳句の本道が実践されているとも言える。

透谷が「荒野の戦ひ」で挙げていた虫について、『俳諧歳時記栞草』で見てみると、「蜂」（春・二月）「蛇螈（とかげ）地虫の類穴を出る」（同）「蝶」（同）「虫」（同）「蚕」（春・三月）「蝿」（夏）「蛍」（同）「蛇」（同）「蚕蛹（かひこのまゆ）」（夏・四月）「蚊」（夏）「蝸牛」（同）「蚰蜒」（夏）「蚤」（同）「蜘の子」（夏・四月）「毛虫」（夏・六月）「黄金虫」（同）「蚯蚓出」（夏）「蝉」（夏・五月）「蛭」（夏）「火蛾（ひとりむし）」（夏・六月）「ちゝろ虫」（秋・七月）「稲春虫（いねつき）」（秋・七月）「蟲螽（いなご）」（同）「蝗（いねむし）」（同）「芋虫」（同）「蟷螂（いなむしり）」（同）「竈馬（いとど）」（同）「絡線虫（はたおり）」（同）「蟋螽（はたはた）」（同）「蛇穴に入」（秋・八月）「蜻蛉（とんぼう）」（秋・七月）「虫」（秋）「常山の虫（くさぎ）」（秋・七月）「鑣虫（くつわ）」（同）「蛁蟟（くつくぼうし）」（同）「松虫」（同）「馬追」（同）「秋津虫」（同）「秋の蝶、秋の蚊、秋の蛍、秋の蝿、秋の蝉」（同）「蟋蟀（きりぐす）」（同）「鈴虫」（同）「蚯蚓鳴」（秋）「蓑虫」（同）「蜩」（秋・七月）と続々と掲載されている。子規の『類分俳句大観』では、春の部に「寄居虫」「蛇出」「蜥蜴出る」「虫出穴」（以上第二巻）、夏の部に「熊蝉」「山蝉」「夕蝉」「蠔（スクモムシ）」「芋虫」「はだか虫」「毛虫」「蚕」「蚕蛹」「鼓虫」「蝸牛」「なめくしり」「蚯蚓出」「蛭」（以上第五巻）、秋の部に「蛇穴に入る」「穴惑ひ」「いとゝ」「稲の虫」「螽」「芋虫」「はたおり」「屁こき虫」「蜻蛉」

「羽きれ蜻蛉」「川蜻蛉」「つるみ蜻蛉」「赤蜻蛉」「茶立虫」「螳螂」「かけろふ」「玉虫」「つゝり虫」「つく〳〵ほうし」「虫」「轡虫」「松虫」「ちんちろり」「筆つ虫」「蝉」「秋の蝿」「秋の蜂」「秋蛍」「秋の蚊」「残る蚊」「晩稲蚊」「秋の蝶」「秋蝉」「きり〳〵す」「蓑虫」「灯取虫」「蜉蝣」「蜩」藻虫啼」「鈴虫」「蚯蚓鳴」（以上第八巻）と子規の気迫と執念が結実しているが、『栞草』を踏襲していることが窺える。

透谷も、明治以降も広く用いられたという『栞草』に目を通していたことが考えられる。第一節で引用した「地龍子」は、花の根元に顔を出した蚯蚓に目を留めているが、『栞草』の「蚯蚓鳴」（三秋）には、「雨ふるときは先ヅ出、晴るときは夜鳴、或はいふ結ぶときは化して百合となる、蟲螽と穴をおなじくして雌雄（めを）になる」という記述がある。シラネは、[注19]中世以来の「四生（ししょう）」という生物の分類を紹介しているが、それは、「母胎から生まれる胎生、卵から生まれる卵生、湿気から生まれる湿生、どこからともなく生まれる化生」である。虫は、湿生あるいは化生と考えられていたという。交合すると百合になるとは、「化生（けしょう）」という捉え方であろう。これに透谷の句、「折れたまま咲いてみせたる百合の花」を重ねてみると、百合は蚯蚓が変化（へんげ）した姿、即ち地を這う透谷が昇華された姿であると読める。百合は、「三日幻境」で、川口村を再訪した折の国三郎の老母のもてなしとして、「老婆は後庭に植へたる百合数株（すうしゅ）惜気もなく堀りとりて我が朝餉の膳に供し、その花をば古びたる花瓶に活けて我が前に置据へぬ。」と描かれている。透谷にとって仙境の花であり、この句は、二度と戻らぬ至福の時間を内包させた、透谷の重層的な生を象徴している。それにしても、「亡友反古帖」に見られる書きながら昂揚していく列挙の仕方は、歳時記から得た知識以上の只ならぬものを感じさせる。和歌的伝統的な秋の情趣に連なる季題もそうでない虫も並列的に挙げられ、「げじ〳〵、百足、わらじ虫」という季語の外にあるものも引きずり出されてくる。

透谷は、あるいは、『千虫譜』を読んでいた可能性があるのではないだろうか。『千虫譜』は、本草学者で幕府の侍医でもあった栗本丹洲（宝暦五・一七五六～文政五・一八三四）が、文化八（一八一一）年に作成した虫譜である。[注20]小西正泰は、[注21]「新旧多くの写本がつくられてきており、おそらく江戸期の虫譜のなかでは最も伝本の多いものであろう。このことは本書の価値をよく示している。」と述べており、『千虫譜』が重宝され、活用されて来たことが窺える。小西に

よれば、[注22]『千虫譜』の材料となった動物標本は、丹洲自身が採集、観察したものの他に、同定依頼や贈呈されたものも少なくなく、採集地は、丹洲が住んでいた江戸を主体として、北は北海道から南は八重山諸島に及んでいる。微小な虫については顕微鏡を使って写生し、「化生」即ち自然発生という考え方を基準に発生を考察し、生態を観察している。また、医師であった丹洲は、薬物としての虫の利用を重視しており、当時の習俗に関わる内容も記述している。科学的、実用的、民俗的に得るものが多い書物であると言える。

透谷は、後に妻となる石坂ミナ宛の書簡（一八八七年八月十八日）草稿で、「明治六年生の父母は生を祖父母に託して東都に去れり、十一年まで五年間生は全く祖父母の膝下に養育せられけり、」と述べているが、明治六年秋、透谷の父快蔵は大蔵省に出仕するため、五月に生まれた垣穂を連れて上京、母ユキは日本橋照降町の自宅で呉服屋を開いたという。[注23]「生の祖父は凡そ世にめづらしき厳格の人にして活発に飛はねることを好む少年をこらすの術に苦しみたる事今もしば〳〵祖母の物語に聞き得る事どもなり、」（同書簡草稿）と、透谷の祖父玄快は、少年透谷の腕白ぶりに手を焼いていたようである。小田原藩医であった玄快（文化一二・一八一五～明治一七・一八八四）について、平岡敏夫『北村透谷研究　評伝』（有精堂　平7・1）[注24]は、「いつの頃からかは不明だが、外科医であり、玄快製造の火傷の薬金明膏は小田原では有名であった。ゴマ油を原料とし、はまぐり詰めであったという。」と記している。平岡は、透谷と同時期に小田原の小学校に入学した坂本易徳（紅蓮洞）の回想（「故北村透谷」『明星』明39・10）から、「此霜焼や火傷の薬が北村氏の祖父の玄快といふ漢方医の創製になつて居つて、郷里では有名な薬で、金明膏と云ふ其の実名を呼ぶ者は無く、北村のやけどの薬、玄快さんの膏薬といつて有名なものでありました」という件を引用している。平岡も触れているように、「此の薬を僕が北村氏の家に貰ひに行くやうになりまして北村氏と懇意となり、一所に遊ぶやうになりました。」と玄快の薬は二人の少年を近づける程、各家庭で用いられていたのだろう。薬も創意製造した玄快が、本草学の虫に関する事典とも言うべき『千虫譜』の写本を所蔵していたことは考えられるし、少年透谷が好奇心に任せて、そこに描かれていた虫の生態、形態を眺めていたこともあり得る。透谷は、先のミナ宛の書簡草稿で、「偖て明治十一年の春となり我がやかましき祖父は中風病にかゝりて其性質は全く一変し生を叱責するの性は変じて生を憐愛するの情とな

れり、」と回想している。透谷は続けて、「然れども生は遂に温良なる性質を養ふの暇はなかりけり」と、自分の天性や遺伝から「憐愛」の薫陶を否定しているが、「憐愛」という言い方から、玄快に対して否定的な感情のみを持っていた訳ではないことが窺える。

『千虫譜』（『栗氏千虫譜六』[注25]）を見ると、「ゲシゝ　カチハラ」「蚰蜒一名蟦衡一名入耳」「蜈蚣　ハカチ」、文化十二（一八一五）年に豊前国小倉中津村で採集され、「何ト名謂スルコトヲ不知」と命名されていない「其色五彩長三四寸許」という足が四十本前後ある長虫、文化壬午（文化五・一八二二）に西丸で採集された、尾と頭にそれぞれ四本の長い足を持つ虫、「一寸ムカデ　蜈蚣」「馬蚿」「赤足蜈蚣　一名百足」というゲジゲジ、百足の類が詳細に描かれている。「げしゝ」には、長門、周防、陸奥、大隈、仙台、加賀の方言が、「蜈蚣　ハカチ」には「古訓ナリ日本紀に出今上総ニテハガチと云古ノ称ヲ不失」と古訓と方言の繋がりも記されており、書き手の興味関心の広がりが表れている。『栗氏千虫譜五』には、斑猫、カミキリ虫、蒼蝿、「青蝿　キンバイ」、「扁前　アカバイ」「牛蝨　ウシバイ」、油虫、屁こき虫、金亀子の類、蝨の類と来て、二頁を用いて、「蚤　顕微鏡ヲ以テ写」と巨大な蚤、同じく二頁を用いて顕微鏡によって観察した巨大な蝨が描かれている。「荒野の戦ひ」における大小の虫の等価な列挙の一因が、実際の大きさを攪乱させる『千虫譜』にあったとしたら、面白い。

「荒野の戦ひ」には、「曾て蛇を平げたる一の大なる蜒蚰が野の長となり、でん〳〵虫が箱をかついで配権を執行し居り」と、現実の弱肉強食を転覆させる設定がされている。『栗氏千虫譜八』には四種の蛞蝓が記載されているが、「安永八年十月山中ノ人姜醋ヲ以テ浸シ食フト云フ山ナマコと云フ」と、むっくり太った巨大な蛞蝓が描かれ、次のページには「蛞蝓　一種大者」として同じく巨大な蛞蝓が描かれ、「大宮八幡林中陰地ニテ獲之尋常ノモノト別ナリ」との注釈がある。続くページには蝸牛が記載され、小児の五疳の虫を治療する薬としての処し方（塩を振って泥を吐かせ、肉を出して串に刺して炙ったものを食べさせる）が説明されている。異形の蛞蝓と実用的な蝸牛の記述も、破天荒な構想を形成する糧になっていたとすれば、詩人は、一見関係がないと思われる地点からも着想を汲み上げてくることが窺える。

透谷がミナ宛書簡草稿で、幼少期の腕白ぶりを回想していたことは先に述べたが、具体的には、「其頃生の最も好み

たる小説は楠公三代記、漢楚軍談、三国史、等にして、日夜是等の小説を手離す事能はざりし程なりき又た生の最も喜びたる遊戯は多数の小児を集めて軍事をまねる事にてありし、生は常に自ら軍師となりて進退運転を司どりけり、是等の遊戯は我やかましき祖父の最も厳禁する所にてありしにもかゝはらず、清く快よき浜辺の砂上にあつまりてかしこのつゝみこゝの丘を城堡と定め、伏兵を隠す可き場所をも見極めて、軍略をめぐらし知勇を奮ひ、砂礫を飛して銃丸に代へ、長短の棒片は、刀鎗を代用せり、」という熱中ぶりである。軍記物語に読み耽り、玄快に禁止されても戦争遊戯に没頭していたことがわかる。幼少期の体験、記憶が後年の創作に発想源として流れ込んでいくのである。中山右尚は、[注26]『毛吹草』に記されている「蛙・蛇・蛞蝓」の「三竦（さんすくみ）」が、「「国家老妾殿さま三ンすくみ」（柳多留・八七）、「なめくじの夢で蛇の子おびえてる」（同、一二〇）のように雑俳川柳など江戸文芸に好んで用いられた」こと、『地雷也豪傑譚』では、「悪賊大蛇丸に対して、尾形周馬が蝦蟇の妖術、その妻綱手が蛞蝓の妖術を使って三竦みの妖術乱闘を展開する」ことを紹介している。少年透谷が、川柳や『地雷也豪傑譚』から蛙・蛇・蛞蝓の三竦みを知り、長じて「荒野の戦ひ」の蛇と蛞蝓の闘争の着想になったことは考えられる。また、植木は、[注27]中世の人々と虫との関わり方が現れている文芸として、『古今著聞集』六九六話の虱に報復された田舎人、御伽草子『俵藤太物語』の、大蛇に頼まれて仇敵大百足を退治した俵藤太秀郷の物語を挙げている。当時の出版状況を調べてみないと何とも言えないが、あるいは、御伽草子の百足退治や仏教説話の人に報復する虱も透谷の脳裏にあったのかも知れない。物語における異形の力を持つ虫と本草学的な観察の対象としての虫が、共に透谷の着想を促したのであるとすれば、荒唐無稽な「荒野の戦ひ」には、明治初年代という近世と近代が交錯する時代相が刻印されていることになる。

終わりに

透谷の「ぬら〳〵とからをはなれた蝸牛」は、民権運動離脱後、収入の途も保証されない中で、剝き出しの自分に肚を括ってこの世を生きていこうという決意の表れであった。蝸牛への自己投影は、俳諧の系譜に連なると共に、敬愛し

た秋山国三郎が蝸牛に託した卑小なるもののリアリズムと可能性も受け継ぐものであった。地を這う姿は、「ハムレット」にも触発された、透谷の実存の表象である。「蝸牛」を未完の戯曲構想「荒野の戦ひ」の数多の虫たちに広げてみると、地を這う虫たちの戦闘とその果ての荒廃という設定には、幼少期の軍記物語の耽読、戦争遊戯、近世の川柳や物語、目に触れていたかも知れない本草学の書物といった体験から自由民権運動離脱を経ての社会批判という透谷の半生が凝縮されていると考えられるのである。

注一覧

注1　引用は『明治文学全集29　北村透谷集』（筑摩書房　昭51・10）による。

注2　橋詰静子「校本北村透谷句集」（『北村透谷研究』25号　平26・6）

注3　注2と同論文の注（3）。

注4　中山栄暁「透谷と俳句」（『解釈』13巻4号　昭42・4）

注5　小沢勝美『透谷と秋山国三郎　附　秋山龍子句集安久多草子（復刻版）』（教文社　平12・9）による。

注6　引用は『新編日本古典文学全集88　連歌論集・能楽論集・俳論集』（小学館　平13・9）による。『三冊子』の校注・訳は復本一郎。

注7　注5と同書の「秋山国三郎年譜」による。

注8　ハルオ・シラネ『四季の創造　日本文化と自然観の系譜』（角川選書　令2・5　北村結花訳）の「第七章　季節のピラミッド、パロディ、本草学」。208～209頁。

注9　『類分俳句大観　別巻』（日本図書センター　平4・4）の「解説」（山下一海）。4頁。

注10　引用は「新編纂の別巻一巻を加え」（山下一海）た『類分俳句大観』（注9に同じ）を用いた。

注11　注8と同書の222～223頁。

注12　引用は『生活の古典双書9　増補俳諧歳時記栞草（上）』（八坂書房　昭48・11）『生活の古典双書10　増補俳諧歳時記栞草

（下）』（八坂書房　昭48・11）による。

注13　植木朝子『虫たちの日本中世史――『梁塵秘抄』からの風景――』（ミネルヴァ書房　令3・3）の「第一章　中世芸能に舞う虫――蟷螂・蝸牛／4　寂蓮と蝸牛の今様」。33～36頁。

注14　注5と同書の「透谷と秋山国三郎」。20～21頁。

注15　青木亮人『その眼、俳人につき　正岡子規、高浜虚子から平成まで』（邑書林　平25・9）の「其角堂永機　江戸の残照」。

注16　注5と同書の「透谷と秋山国三郎」の第八節（30～36頁）。

注17　『透谷全集』第3巻（岩波書店　昭30・9）の「解題」（勝本清一郎）。645頁。

注18　注8と同書の223頁。

注19　注18に同じ。

注20　『江戸科学古典叢書41　千虫譜』（恒和出版　昭57・12）の「解説／三、『千虫譜』の成立」（小西正泰）。8頁。

注21　注20と同書の「解説」。9頁。

注22　注20と同書の「解説／四、『千虫譜』の概要と特徴」。

注23　透谷の年譜は『明治文学全集29　北村透谷集』の「年譜」（小田切秀雄編）による。

注24　平岡敏夫『北村透谷研究　評伝』（有精堂　平7・1）の「第一章　生いたち／3　祖父母と祖母／祖父玄快」。39頁。

注25　小西によれば、『千虫譜』原本は、栗本家に伝えられてきたが、関東大震災で焼失してしまったという。『江戸科学古典叢書』収録の『千虫譜』は、『栗氏千虫譜』全十冊（曲直瀬愛旧蔵）を底本としている（「解説」9頁）。

注26　『古典文学動物誌』（『國文学　解釈と教材の研究』39巻12号　平6・10　臨時増刊）「蛞蝓」項目執筆　中山右尚。

注27　注13と同書の「第二章　中世の信仰と刺す虫――蜂・虱・百足・蚊／3　虱の遊びと発心」及び「同／4　俵藤太の百足退治」。

付記　透谷のテキストは『明治文学全集29　北村透谷集』（筑摩書房　昭51・10）を用いた。引用に際して、原則として旧字体は新字体に改め、振り仮名は適宜省略した。